

---

# バアさんとメールとクリスマスと

hasumi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バアさんとメールとクリスマスと

### 【Zコード】

N1219D

### 【作者名】

hasumi

### 【あらすじ】

どことなく優柔不斷な僕と勝気な彼女。隣に住むバアさんが持つ携帯に一通のメールが届くところから始まるストーリー。時期は秋から冬へと向かって……。

「で？ どうしたのよー？」

その言葉にチラッと視線をあげると田の前の丸顔へと焦点をあわせる。

「……どうしたのよーかな」

口のもりながら答えると、キリキリと音を立てて机に向かって彼女の表情が引きあがってきた。

「あのね、ここはお洒落なイタリアンなお店でも、シックなフランス料理店でも

ないのよ？ 野菜炒めだろうが、レバーラ炒めだろうがビーフでもいいから決めて。」

詰め寄る彼女、顔が迫つてくるように見える。

この顔を自分で見たことがあるのだろうか？ 子供だったらもう一度と悪い事を

しません、と即座に誓いを立ててしまう。涙みのある丸顔と言つのも珍しい。

でも、ここは恥みどらうだつた。野菜炒めとレバーラ炒めは大きく違う。

特にここのは定食屋さんはシイタケの味が優しい野菜炒め、シャキシャキとした歯ごたえを残す二郎が美味しいレバーラ炒め。双方に良い部分はあるのだ。しかも外食はそつそつできるものでもない、やはりここは慎重に慎重を重ねなくてはならない。

「お待たせしましたあ」

間延びした店員さんの声が落ちてくる。

皿の前には湯気を立てていてる野菜炒め。

「もうね、野菜炒めを頼んどいたから。どうせ決まらないんでしょ  
う?」

「……はい。」

白ごはん飯も味噌汁も良い香りだ、野菜炒めからも芳醇な香りが漂つ  
てくる。

しかし、

「レバーラが良かつたかも。」

野菜炒めも美味しい。それは判っているが、ここにとこり不摂生が続  
いている。

このような場合にはレバーを食べたほうが元気が出るのではないか?  
そんな考えが脳みその前半分を占め始めていた。

そんな思いに零れた言葉に彼女は「はあ?」

「は」の後の「あ」は完全に威嚇で使う言い方だ。語尾が上がるが  
上がり方の矢印が斜め上に上がるのではなく、下から曲線を描きな  
がら上がっていく。

昔映画で見たことがある。お坊さんのお兄さんが見事に剃り上げた強面  
のお兄さんが

使つ「あ」だった。見事に使いこなしているな。

「いえ、なんでもないです。頂きます」

箸を手にして野菜炒めを口にする。

うん、やはり美味しいな。いつもと同じようにシイタケの皿みと絶妙  
な塩加減が

ご飯を進ませる。野菜炒めでこれだけ美味しいと思つのならレバーラ  
だつたら

どれほど美味しいと感じただろう。

夢にも見そうな、非常に残念な気持ちだ。悲しいとも言える。

「はい。これ、半分あげるから、そつちも半分よこしなさいよ。  
取り皿に乗つて突き出されたのは夢にまで見たレバーラだった。

短かつたな夢。

マンションに毛の抜けた程度のアパートに帰ってきた。

彼女は駅で2つほど離れた美容院で親と一緒に住んでいる。と言つ事は、ここは僕の部屋だ。一人暮らしを夢で描いていたときはもつと洒落た

マンションに住んでいるはずだったのに、現実は厳しいね。

「痛たた」

その毛の抜けたアパートの部屋の前、鍵を開けながら脇腹を押さえているのはレバーにあたつた訳ではなく、彼女のするどい左フックをねじ込まれたからだ。

「せっかく頼んで上げたのに何でこと言つのよー…まつたぐ。」

「・・・ごめんなさい。」

でも、正直に言つただけだったのに。

「野菜炒めもレバーニラも似てて、わざわざ取り分けで食べるほどじやなかつたね」

組んでいた腕を振り解いて、そのままドスンと硬い拳が来た。そして今、体を少し横へと曲げるようになしながら鍵を開けている僕がいる。

「早くあけてよ。なんで自分チなのにそんなに手間取るのよ

興奮覚めやらぬ口調で彼女はまくし立てる。その口を手で押さえようかと思つたとき、

チヤ、と金属の音がして隣の部屋のドアが開いた。遅かつたようだ。「まったくまあ最近の若い子は結婚前に堂々と男の部屋に入り浸つて。

それもコソコソしていれば可愛いものを、男をアゴで使いながら家の前で騒ぐなんて。」

分厚い眼鏡で異常に瞳が大きく見える顔を、ドアの隙間から覗かせて嫌味を言つるのは

隣に住んでいたバアさんだつた。

覗いている視線はドアノブより低いのでは? と想つばかりの女たちや

な身体に

乗っているのは彼くちやな顔。  
名前は知らない。

「ああ、こめんなさし 大人しくしますので」とモニモニ言ひ、僕を差し置いて

彼女は前にでると

すみませんね。でも、迷惑をおかけしてしまった?朝から辛氣臭

この結果を踏まえて、今後は、より細かい課題が発見され、

突つ込んでみる。

もが心の中でたゞ

卷之三

小生意気な女の子に言われるなんて。そうかい、毎週のように寝泊

ここに止めたのれ

「やめようかな？」

「睦み事？」と首を捻る彼女に教えてあげた「エツチの事。」

見る見る顔を赤くして丸い顔が膨らんだように見えた。彼女は僕から鍵をひっこむと

あつと言ひ間に玄関をあけて中へと入つていつた。なんだ、出来る

のなら最初から開けて  
くればよかつたのに。

2

何もない夕方。部屋には容赦なく西日が差し込んでくる。

夏なら窓を全開にして日陰を探すかのように部屋の隅へと手足を伸

ばしているところだが、

今は冬。午前中からまったく差し込まなかつた口差しを出来る限りエネルギーとして

溜め込む為に、田のあたる部屋の中心へと膝を抱えて座つてゐる。灯油を無いにいかなくちゃね、と思ひ反面、年内はこのままでいるのではなかろうか？

と、じことなく挑戦者のような気持ちも湧いてくる。今日のところは挑戦者の勝ちのようだ。きっと田が落ちれば後悔するのだろうが。

トントン

珍しくノックの音だ。珍しそぎてすぐには反応できない。なんせ毛の抜けたアパートだ、保険はあるか新聞の勧誘すらこないのだから。

彼女でもないだろう、彼女が家を抜けられる時間ではないし、何よりノックなんかしたためしがない。僕が寝ていようが着替えていようがお構いなしのだから。

それに自慢ではないが、友人も好き好んで尋ねてこない。特に暑さ、寒さが厳しい

季節であれば尚のこと。教えたはずの携帯電話が鳴らないのもきっと季節が

厳しいからだろう。嫌われているわけじゃない。きっと嫌われてはいないと思う。

ドンドン

考へているうちにノックがノックとは言えない音になつた。

「はい？」ドアを開けると

「くるなら、もっと早く開けなよ。歩いて4歩で突き抜けるような

部屋に

住んでいるのだからわ」

分厚い眼鏡が見上げるような視線で僕に向けられ、皺くぢや顔がそ

うしゃべった。

「えつと、何でしょ、」

部屋が狭いのは一緒に？と思ひ浮かびつつもそう聞くと、「アンタが、若いんだから、こんなのが得意だろ？見てくれないかい。」

銀行強盗のピストルよろしく突き出されたのは携帯電話だった。

「これって・・」

「なんだよ、若い子なのに携帯電話を知らないのかい？おかしな子だね。」

「いや、携帯電話は知っていますけど。」

「ああもう相変わらずはつきりしない子だね。そんなんだから、彼女が来るたびに

やいのやいの痴話喧嘩になるんだよ。毎週毎週よく飽きないね。」

「ええつと、ごめんなさい。」

「何かを、メールを受信したって出てんだよ。メールってアレだろう？」

ファックスだらけ？どうやつたら見られるのか教えて貰おつと思つてさ

「ファックス・・じやないけど

「ファックスじゃないのかい？じやあ何？これ。」

「手紙・・・ですね。」

「手紙なんだろ？じやあファックスじゃないか。」

「・・・・・ファックスです。」

眼鏡越しの異常に大きく見える瞳が僕の事を覗き込んでいる。勝ち誇ったかのように口端を引き上げると、皺が余計に目立つた。小さな溜息をつくとバアさんから携帯を受け取る。

「大きいな、これ。」

年代モノ、とまではいかないものの、一世代ほど前の機種だった。傷だらけのボディはバアさんが持つているのには納得できそうな雰

囲気を

醸し出している。

「ボサッと魅入って無いで、早くファックスを出してもらおうか。いつもの調子でまくし立てられ、メールのボタンを押す。

「ええと、受信トレイで未読がこれで……と」

中身を読んでしまうのはマナー違反と思い、押したもののまま画面を見ずに

バアさんへと携帯を手渡した。

「早く紙に出しておくれ。字は大きめがいいね」

「……無理です。」

「何でよ? ファックスなら、このへ、バアーと紙に印刷されるんだろう」

「このファックスは紙には出でないんですよ。この画面を読んで下さい。」

チラリとバアさんは手渡そうとする携帯を覗き込んだ。が、すぐこの文字が小さいねえ。なんだいこれは。無理だよ。」

「無理つて……どうするんです?」

「読んで。」

「へ?」

「読んで聞かせてくれ。アンタが。」

「僕が?」

「アンタも見えないのかい?」

「いや、字は見えます。」

「じゃあ問題なからう。あたしゃね読みまれて困る手紙なんざ来ないんだよ。ほら早く。」

バアさんは差し出した携帯を受け取らうとせずに、早く早くとせりついてきた。

しうがなく画面を覗き込むとすぐこは読み出せなかつた。

「なんだこれ?」

「どうしたんだい? 最近の若い子は漢字とか読めないんだろう?」

「いや、漢字どこのか。ええと読みますね。」  
「こんにち、ハゲ？」

「あれ違うな。読みづらいなあ、これ漢字は使ってないし句読点もないし」

“「こんにちはげんさかげんさですまためーるする”

「メールする。は判るな。またメールする。だ。」

「メールって言つのはファックスなんだろ？？」

「そうそう。携帯にするファックス。こんにちば、だ。で、またメールする。」

「げんさかげんさです？」

画面を見たまま唸る僕の手元、皺くちゃ顔が覗き込む。  
分厚い眼鏡は老眼じゃなく極度の近視なのか、レンズに  
画面を押し付けるような位置で呟いた。

「ああ“せ”なのか。あたしゃ“き”に見えたよ。げんきかげんき  
です。」

「それか。今日は、元気か？元気です。またメールする。だ。」

「随分と偉そうな手紙だね。これはこのまま返事を返せるのかい？」

「大丈夫だよ、返信するの？」頷くバアさんに向かって

返信のボタンを押した携帯を渡そうとする。

「へ？何言つてるんだ。あたしゃ見えないんだよ。使い方だつて  
判らないのに。アンタが打ち込んでよ。」

「え？僕が？手紙なんか他人に・・・」

「さっきも言つたけど、あたしゃ人に見られて困る手紙なんぞ書か  
ないんだよ。ほら早く。」

言い返そつと口を開く僕を氣にもせずにバアさんは言葉を続ける。

「拝啓」

「え？拝啓から？」

「ファックスは手紙なんだよ。手紙はその人の人柄が表れるんだ、  
ちゃんと書いて

おくれよ、いいね？拝啓、お手紙ありがとうございます・・・」

「」で押し問答をしても人生論を語られて負けるのは田に見えている。

それにもメールを読んだ時点でこんな事になるんじゃないのか?と言ふ氣はしていた。

田慢じやないけど、そんな良くない予想をあてる田信はたつぱりあつた。

### (3)

火曜日の昼下がり、僕と彼女は近所のファミレスに居た。

僕はいつものように彼女が食べたいと言ったパフェを注文して、彼女はいつものように自分が食べたいケーキを頼んだ。

そしてその両方は彼女の前にある。

「それで、学校のほうは問題なく4年になれそうなの?」

彼女がスプーンでパフェのクリームを搔き分けながら問いかける。

「んん。それは問題ないとと思う。」

「あつそう。じゃああと1年ちょっとで卒業ね。」

「そうだね。卒業。」

僕はドリンクバーで淹れてきた珈琲を啜るように飲む。

「卒業したらどうするの?」

「普通にサラリーマンじゃないの?フリーターで食べていけるほど生活力ないよ僕は。」

彼女を見るとクリームを搔き分け辿り着いたコーンフレークをカリカリと食べていた。そんなに好きなら最初からコーンフレークを食べればいいのに。

両手で珈琲カップを包み込むようにすると、僕は外を眺める。

クリスマスが近いせいか、なんとなくいつもより派手な街並みだ。「で、私たちはどうするの?」「

「んん、どうするって、どうしたいの？僕は何でもいいよ」  
道路向かいのクリーニング店で、おそらくパートであるう女性が  
スノースプレーでサンタクロースのシルエットを窓に吹き付けてい  
るのを

ぼんやりと見つめて答えた。

「バン！」とテーブルが鳴った。乗っていたガラスの器や陶器の器、ス  
テンレスの

スプーンやフォークがチリリと同調する。

驚いて顔をあげると彼女が立ち上がっていた。

丸顔が赤く膨れたように見える。怒られる、と思ったのもつかの間、  
彼女の瞳が光り始め、すぐにその光りの粒は頬を伝つていった。  
初めて見る彼女の表情に僕は啞然とし、何を言えばと考えている間に  
「もういい！バカ！」

そう言うと彼女が店から飛び出してしまった。

立ち上がり追いかけようか、と思いながらも立てなかつた。  
周りの客が遠慮しがちにもしっかりと僕を見ている。  
なるほど視線とは痛いものだ。

「今のはアンタが悪い」

「！」

いつの間にか田の前に皺くちゃ顔が座つている。

背が小さいせいでテーブルから首だけ出しているようだ。

「生首・・・

「は？なんだい。何て言ったんだい？」

「いや、なんでも・・・」

バアさんは彼女が手をつける予定だったケーキへと手を伸ばし引き  
寄せると

フォークを手にして小さく切り始めた。そして視線をケーキへと向  
けたまま、

「今のはアンタが悪いね。いいかい？優しいと優柔不斷は違うんだ

よ。

普段はそれでもいいかもしけんが、男は「口ひて時を間違えちゃいけない」

「食べたんだつたら、お金払ってくださいね」「はい？」聞こえない振りだ。全国的にバアさんはこの技を身に付けているのだろうか。

溜息混じりに田の前で口を動かすバアさんを見ると、バアさんは話を続ける。

「ウチの一人息子なんてね、そりやもつ格好よかつたんだよ。仕事も出来るし

あたしなんか聞いた事も無い国にもショッチャウ行つてたんだ。決断力があつたね」

ケーキを食べながら自慢しいしいにそう話す。余程、機嫌がいいのだろう

床に着かない足をパタパタと交互に揺らしている。天国に向かって歩いているのか？

冷めかけた珈琲カップを手にして口を押し付けながら聞いてみた。

「バアさんの息子さんつて何してるんです？」

「記者さんだよ。それもねえ、大きい会社は自由が利かない！って言つて飛び出して

一人でやつていたんだ。一年のうち日本に居たのは一ヶ月もないよ。格好いいだろ？」「

「へえフリー記者さんね。大変だね。」

「大変なんかじゃないよ。好きでやつているんだもの。本人は幸せさあ。でもね、

男はそうじやなくちやダメな時があるんだよ。うん。相変わらずパタパタと足を揺らしてケーキを食べるバアさん。そうか息子さんなら

もう少し常識があるかもしえない。じつじつお年寄りほど自分の息子には弱いものだ。

何かあつたら息子さんから一言言つてもいいおつと思ひながら。

「今度はいつ日本に帰つてくるんです？」

「帰つてこないよう」

バアさんはケー キを頬張りながら答える。薄い唇の脇にクリームがついて子供みたいだ。

「向こうで暮らしているんです？」

「いや、死んじまつたよ。」顔をあげず、相変わらず足をパタパタと揺らしたまま続ける。

「どつかの戦争の取材で出て行つて。戦争が終わるまでそこにいて。終わつて復興の

様子を取材するんだつて言つて。手紙にな、“やつと終わつたよ。これからは笑顔を

取材するんだ”つて送つてきたんだけどな。1週間もしないいつかに地雷踏んじまつて飛んだらしいよ。」

「え・・・」

「本人はまあ幸せだつただろうね。好きな事やつて好きに死んで。男として格好良かつたよ。一人息子としては最低だけどな。アタシヤ日本の戦争を生き残つて、息子は他所様の国の戦争で死んじまつんだもの。」

「・・・ごめんなさい」

「へ？何でよ。アンタが息子を殺したわけじゃなかろう。謝るなんてオカシイじゃないか」

「いや、何か聞いちやいけない話だつたかなつて。」

「変な子だね。話したくないことは話さないよ。」ひつやつて話す事も供養なんだよ。

気にする事はないやね」

バアさんはどこ吹く風とばかりにケー キを食べ続ける。

と、不意にバアさんの脇から電子音が聞こえました。

一瞬、自分の携帯を突っ込んだ尻のポケットへと手をやる。でも自

分のでは無い、

音がまるで違うのだから。  
バアさんがゼンマイ仕掛けの人形のようにカクカクと動きながら袋から

あの携帯を取り出す。

「ありや、メールを受信しました。だつて。丁度良かつたね。」

何が丁度良かつたのだろう。そんな事を思つ間も無く携帯が突き出される。

「読んでくれ

「ここで？」

「あのね、あたしゃ人に読まれて困る手紙なんざ来ないんだよ。」

「はいはい。」

「ちょうど解説させてくださいね。ええと、こんなにま、は〇〇K

ボタンを押して未読メールを選び、そのままメールを開き読んでみた。

“「こんにちはげんをありがとうめーるありがとこのたびあどれすおしえるください”

「ちょっと解説させてくださいね。ええと、こんなにま、は〇〇K

でしよう。

で、メールもOK。げんさんは元気だから。あとは・・・

ファミリーレストランの紙ナップキンに書き出してみると。

「ありがと、は、ありがとうだね。このたびあどれすおしえるぐださい。」

ください、は下さいだから。アドレスつてメールじゃないな住所つて意味かな」

バアさんが何かを言つている。でも田の前の文章に集中していた。

「今日は、元氣ありがとう（？）メールありがとう。この度、住所教える下さい。

教えて・・かな。教えてください。かもね。」

バアさんが食べ終わったケーキの皿を脇へと寄せて、ほつほつと頷

いている。

手には珈琲のカップ。もう少し体に良いものを摂つたほうが良いのでは?

「で、返信するんでしょう?」半ば諦めでそう聞き返すと、バアさんが二パッと笑つた。

「今日は察しがいいね。でも、その前に一つほど聞いていいかい?」

「答えられることだつたら答えますよ。何でしよう?」「このファックス、相手、誰なんだい?」

「へ?」

「あたしや誰からファックスが着たのかわからないんだよ。これは誰だい?」

「・・・だつてこの前、返事返してたじやん」

「そりゃ、わざわざ送つてきてくれたんだもの。返事くらい返すだろつよ。

それが最低限の礼儀つてもんだろう。」

「知らない相手にメール送つて、それでまた返つてきたんだ?ええ?」

がつくりと崩れそうになる。どこかの業者かもしれないのになんて無防備なのだろう。

老人を狙つた犯罪が減らないわけだ。

「二つって言ってたよね?あと一つ何?」

「さつきも言ったんだけど、アンタ話を聞いてなかつたようだからね。もう一回言うよ、

あのクリーニング店の中からこっちを睨んでいるのは彼女なんじゃないのかい?」

指さすほうをゆっくりと視線を送る。白く幻想的な雪文字、スノースプレーで作った

Merry Xmas の文字。まるで彼女の顔にXの文字が張り付いたように

バッテンの左右から見事に吊りあがつた彼女の瞳が見えた。

(4)

手元にあるのはスキー・ツアーのパンフレットだった。

そして自分の部屋の中、鼻歌混じりに紅茶を淹れているのは彼女だ。この前の件についてはバアさんに感謝しなくちゃいけない。その後、ファミリーレストランの中から大げさに手招いて彼女を再び呼び出し、再び席へと着かせると分厚い眼鏡奥の瞳をぎょろぎょろさせながら、この子は女の気持ちが判らないんだよ、酷いね。

はつきりしない性格で、一生うだつもあがりそうにない。出世なんざしないよ、と

散々僕を罵倒し、最初はうんうんと頷いていた彼女が最後は「そんな事ありません！」これからきっと頑張ってくれます！」と再び周りの視線を痛いほど浴びながら言い出すと、

「じゃあ問題は解決だ。それで良いんだね？」と諫めてしまった。そのあと僕に向かつて、

「アンタもしつかりおし。普段はまかせつきりでもいいけど、いざつて

時にはアンタが先頭に立たなくちゃダメなんだからね。」と説教をしたお陰で

今では彼女とバアさんは仲良くなつた。

僕としてはいよいよ落ち着いて悩んでいる場所がなくなつた気がしているが、まあしょうがないのだろう。

今日は、毎年行っているクリスマスのスキー旅行を決める為に彼女は来たのだ。

「今年はどこにする？八方や野沢あたり？それとも猫魔とかにする

？」

パンフを眺めながら僕が聞く。

「そうね。」彼女が紅茶をテーブルに置きながら答える。

いつもだったら、今年は滑りたいから、とか、温泉が、とか言い出すのに今日は

言わなかつた。

「どうしたの？」僕が聞くなんて珍しい事だ。バアさん効果か？

「ね、隣のおばあちゃん、クリスマスは一人なのかな？」

「さあ、気にしたこと無かつたし。でも一人かもね。旦那さんの話

しは聞かないし、

一人息子さんも亡くなつたつて話しだし。「

「寂しくないのかな？」

僕は考える。いや、本当は考える振りをした。答えはすぐに出でいるのだ。

「寂しいだらうね。」

「今年はスキー行かなくてもいいかな？」

彼女が申し訳無さそうに言つた。僕は紅茶を一口ほど飲んでから、「行かないで、どうするの？」と聞いた。

「ここでケーキ食べようよ。」

「バアさんを呼んで？」

「ダメ？」

「プレゼント、おバアの分は半分コね」

彼女が大きく頷きながら、僕に飛び込んできた。持っていた紅茶を零さないように

慌ててテーブルに置くのが精一杯で、したたかに頭を壁にぶつけてしまつた。

間髪いれずに向こう側から壁を叩く音。くぐもった声でバアさんの

「つるさいよつー。怒鳴り声が聞こえた。

ここのはバアさんの家。そして今日はクリスマスイブ。バアさんは頭に三角形の帽子を被つている。鏡を見れば僕も被つていた。

「こんな古典的な・・・」呟くと、バアさんがすかさず、「クリスマスって言えばケーキに帽子だらうよ。ダメだね風情がない男は」

もう辞めちゃいな、と自分に言われるのを彼女は苦笑しながら聞いていた。

3人分なので今年のケーキはホールにした。古典のが好きらしく、バアさんの要望で

生クリームにイチゴのケーキだ。

そのケーキを切り分けながら彼女が僕にワインクで会団をした。

「バアさん、今日はケーキだけじゃないよ。プレゼントもあるんだ。

」

そう言いながら、小さな封筒を渡す。バアさんは眼鏡奥で目を細めながら、なんだよ、とまことでもない声で

封筒を開ける。封筒には小さな紙、蛍光ペンで“携帯電話引換券”バアさんの顔がきょとんとなる。

彼女が小皿に乗せたケーキを差し出しながら説明する。

「ほら、おばあちゃんメールの字が小さいから読みづらいって言ってたでしちゃう?

だから文字が大きくて、もっと使いやすいのを買えるようになつて。後で一緒に

買いに行こうよ。一緒に選んであげるからね。」

バアさんはその言葉にニコニコしながら、それでもゆっくり首を左右に振った。

「ありがとうね。でも、携帯は代えないんだよ。」

「どうしたの？それは古こから使つてないナビ、今はもうと使こやすいの出でているよ。

番号だつて変わらなくとも平氣なんだか。」と僕が話す。

「本当にありがとうね。でも良いんだよ。」

なんで・・つて言おうとしたらバアさんが話を続けた。

「この携帯ね、息子のなんだよ。」

「息子さんつて、前に話をしてくれた？」思わず僕は聞きながら姿勢を正した。

「そうだよ。外国に行くときにな、外国じゃ使えないからつて置いていったんだよ。

ちやつかりアタシの口座で契約しててさ。またくどうきみつもない子だよ。」

「じゃあ・・・」

「形見なんだよ。これ以外はね、焦げちゃつたり、血がついてたりで見るに忍びなくて。骨も無かつたからお墓にいれちまつたんだよ。」  
バアさんはそう言つと、シユワシユワと泡をたてるシャンメリーニのグラスを見つめたまま。

「悪いね、せつかく氣を使つてもうひたのこ。温つぽくなつつけつてね。

まあ今どき身寄りの無い年寄りなんぞ珍しくもないんだけどや。」

僕も彼女も黙つてしまつ。そなんだ今年はこうして一緒にいてあげられても

来年や再来年はまだしも5年後10年後も、と言つわけには行かないのだろう。

「さて、と」寂しくなつた氣分でも紛らわせるため一々でも点けようかと

リモコンへと手を伸ばした時、

カタン、と玄関先で音がした。ポストに何か入れた音だ。  
すぐに郵便配達のバイクの音がする。何か届いたようだ。  
立ち上がりうとするバアさんに小ちく手をあげて制すると、

彼女が立ち上がり玄関を開ける。とは言つても歩いて4歩で突き抜けるような部屋だ、

ちょっと立ち上がって後ろを振り返った程度の動きなのだが。

「おばあちゃん、はい、これ」 彼女が渡したのは茶色い封筒だった。

「ああありがとう。どこからだろうね。」 バアさんがいつものように封筒にレンズを

つけるほど顔を寄せてみて先を見る。

「なんだい、なんて書いてあるのかちっとも判らないよ。アンタ、開けておくれ。」

「え？ 僕？ 人の手紙とか・・・」 彼女とバアさんが声を揃えて

「あたしゃね、人に読まれて困る手紙なんざ来ないんだよ」

「そうでしたね、はい。」

見たことも無い切手を貼られた封筒はやけに丁寧に封がしてあった。指でそれをキザキザに開きながらも開封すると、逆さにして振つてみる。

出てきたのは写真と白いレポート用紙だった。

いつの間にかバアさんが手にしている写真を、3人で顔を寄せ合つようになる。

黒人女性が赤ん坊を抱いている写真だ。

次に僕は白いレポート用紙を手にした。随分とペラペラな薄い紙に、そこには鉛筆で

“こんにちはたあにやといりますゆうすけのこじもげんきありがとう”

その下にボールペンで

“初めまして。僕はこの国でボランティア医師をやっているものです。

顔立ちが東洋的な赤ちゃんがいたので聞いたら父親が日本人だと教えられたので驚きました。この国で報道関係の仕事をしていた祐輔さんと言う方のお子さんです。祐輔さんは僕が来る2年ほど前

に地雷で

お亡くなりになつたとの事、お悔やみ申し上げます。もし同じ関係の方でしたら・・

「バアさん、これ」読み上げようと顔をあげると、バアさんが皺くちやの顔を

さらに皺くちやにして写真を見つめていた。そして搾り出すような声で、

「この子、祐輔の」

「やうだね、息子さんの子供らしい。向こうで奥さんを見つけたんだね」

“お母さんはターニャと言います。祐輔さんの事故のあと日本への連絡の取り方が判らずに方々手を尽くしたのです。手帳に殴り書きされて

いたメールアドレスを見つけて、日本にいる友人（あまり口外は出来ませんが

ビザは無いと思われます日本語も通じるか難しい様子でした）にメールを送つてもう一つに頼んだようです。“ご関係の方でしたら以下の連絡先にご連絡を頂きたく・・・”

「なんだい、あの子は携帯電話を勝手に契約してたと思つたら、今度は孫かい、

まったくしようがないね。」憎まれ口を叩きながらも

眼鏡越しに見えるバアさんの瞳は真っ赤で、溢れかえった涙が頬の皺を伝つて

滴つていく。彼女はそつとバアさんの肩を抱いて一緒に泣いていた。狭いアパートに随分と素敵なクリスマスマッセージが贈られてきた。

滲みそうになる涙をそつと袖で拭いながら、

「バアさん・・」と声をかけようと手を肩へと乗せようとすると、バアさんはすくっと立ち上がり、

「ほら、何してるんだい！アンタから。行くよ。」

「へ？」

「へ？じゃないよ。なんでいつも愚図なのかね。この子に会いに行  
くんだよ。」

「僕も？」

「僕も？じゃないよ。彼女も一緒に。外国なんざ行つた事ないん  
だ。それに

アンタだけじゃ頼りないだらう。彼女がいればナンボかはマシだよ。

「  
彼女は田をぱけへつせめてる。そつなのだ、いくらお互いに理解  
をして仲良く

なつたとしても性格が変わるわけじゃない。このバアちゃんはいつも  
うバアさんなのだ。

僕は生涯で一番深い溜息を吐きながら、

「少し早いけど、ハネムーン代わりになるかなあ

一瞬の間の後、丸顔を紅潮させた彼女が僕へと飛び込むように抱き  
ついてきた。

「アンタら一人前でまぐあう氣かい！」

押し付けられた唇の背後からバアさんの怒鳴る声が聞こえた。

END

(後書き)

規定文字数があつた中で押し込み気味に作られた文です。  
作品と呼ぶには恥ずかしい限りですが、  
もし最後まで読んで頂けたのなら嬉しいです。  
ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1219d/>

---

バアさんとメールとクリスマスと  
2010年10月17日01時47分発行